

県外の大学で、勉強やサークル活動にがんばっている真鍋大補くん和小笹智子さんは現在大学2回生。
今回は夏休みで帰省中の2人を紹介します。

小笹智子さん・大補



工学部工業デザイン学科に在籍し、建築の図面をひいたり、空間デザインなどについて勉強中。将来は、自分の手で建物や社名を表現する公共マークを作ってみたいな！
サークルは、ライブセービングクラブ（海難救助隊）で人工呼吸や海の知識を学び、プールや海水浴場の監視をしたりしています。今年は北海道の「よさこいソーラン祭り」と、高知の「よさこい祭り」に参加し、踊りで思いっきり夏を満喫しました！

大学では法学部で勉強しています。勉強は一人暮らしですが、小さいころから料理はわりと好きだったんで、ちゃんと自分で作って食べてるんです。休みの日は、もっぱら野球・友達十二人です。チームを結成

し、運動不足を解消しています。今一番興味を持っているのはバイク。今年の五月に自動二輪の免許を取得したんで、友達のパイクを借りて走り回っています。風をきって走るそう快感、最高ですね！

真鍋大補くん・立田



戦後の解放運動・教育・行政が どのように行われたか ⑩

弘岡の大火

（高知のオールロマンス事件）

一九五八（昭和三十三年）三月五日午後二時五十分ごろ、吾川郡春野村（現春野町）の被差別部落でおこった火事は、おりからの強風にあおられ、三時間足らずのうちに、民家七十七戸、倉庫三棟をひとためにしてしまいました。

この火事で焼けだされた二百七十九名の地区の人びとは、そのほとんどが日雇いや農業の仕事をする人たちでしたが、この一瞬の出来事に、ただ呆然として焼け跡にたたずむばかりでした。この大火事で人びとは今まで築きあげてきた財産をすべて失い、寒風のなか放り出されたのです。

強風と乾燥した空気という悪条件がありました。それにしてもどうしてこのような大火事になったのでしょうか。弘岡中南地区の人びとは、その条件を抜き、考えました。第一に、狭いところに住宅が密集し、そのほとんどが古くなっていったこと。

第二に、住宅の三分の一がわらびき屋根であったこと。

第三に、家の軒下が通路となっていて、道といえる道がなかったこと。

第四に、消火用の水がなかったこと。（唯一あった用水路は、工事のため止まっていた。）

このような悪条件がそろっていたため、

同和教育シリーズ

火がつけば大火事になることは分かっていた。しかし、村当局は、このような状態を改善し、地区の人びとの暮らしを向上させるための取組みを、ほとんどしていませんでした。

村は、とりあえずバラックを建て、焼けだされた人を受け容れました。

落胆していた中南地区の人びとも、力を合わせて復興にとりかかりました。その時、二度とこのようなことがないようにと願い、たびたび話し

合いを持ち、次のような取組みを決めました。

- ① 消防自動車が入れる広い道をつくる
- ② 防火用の施設をつくる
- ③ わらびき屋根をなくす

役場もできるだけの応援はしてくれましたが、今の時代に諸制度が整っている時代ではなく、地区の人びとはほとんど自力で取組みました。

区画整理をし、道路をつけ、上水道を整備し、消火栓とホースをつけ、防火用水槽をかねたプールを作るなど、一つ一つ、団結と努力で解決していきました。仕事を必死で探し、かせいだお金で日高村や吾北村の古家を買ひ、家を建てた人もいました。

役場もこれをきっかけに、公営住宅の建設を進めて行きました。

この大火は、高知県で、差別実態をそのままにしてきた行政の責任を追及していくきっかけとなったので、高知のオールロマンス事件とも呼ばれました。